20260308 朝礼拝　マルコによる福音書 8 章 27～33 節

「それ言わない方がいいですよ」

今日の聖書箇所は、ただ知っているということと、心から信じているということの間にある、大きな違いを分かりやすく教えてくれています。イエス様の一番弟子として知られているペトロさんの言動を通して、いや、その失敗を通して、私たちも一緒に学びたいと思います。

ある時、イエス様は弟子たちに問いかけました。「街の人たちは、私のことをなんと言っているのか」と。ある意味、世論調査というやつですね。世間のイエス様理解について、イエス様はお尋ねになった。弟子たちは、自分が見聞きした世論について報告していきます。「洗礼者ヨハネだと言っていました」とか「預言者エリヤだと言っていました」とか。ところで、これら 2 つの世論には、共通点があります。それは、すでによく知られている事実に基づく考え方であるということです。この 2 つの世論には、新しい気づきや着想というものはなく、自分たちが学び、知っている事実に、イエス様の存在を当てはめて理解しようと試みています。この試みには、未知なることへの興味とか、知らないことを受け入れようとする勇気が大きく欠けています。ある意味で、イエス様というよく分からない存在を、ヨハネとかエリヤというよく知っている存在に重ねることで、安心を得ようとしているわけですね。こういう理解の仕方は、私たちの神様理解、イエス様理解にも通じている部分があるかも知れません。そもそも神様も、イエス様も完全に把握することは不可能な方々ですから、私たちは、その「知り得ない存在」という状況に対して、多少なりとも不安や心許無さを覚えます。だから、ことを急いで「イエス様って、私たちがすでに知っている、こういう方に近いよね」とか「神様って、つまりあんな方ですね」とか、自分の知り得ている存在に落とし込もうとすることがあります。例えば、イエス様のことを親しい兄弟や友人に例えてみたり、神様のことを親や他の神々に寄せて考えてみたり、という感じです。そういう風な理解の仕方は、入り口としては有効でも、例えば子どもに説明する時には良くても、イエス様や神様の本質を言い表すには、足りない部分が多い。やっぱり、イエス様や神様を知るには、既存の知識にはないことを受ける、すでに知られていることを飛び越えて理解を広げる、そ

んな知恵と勇気が必要です。

その点、ペトロさんは優秀でした。世論調査の結果を聞いたイエス様が「では、あなた方は、どう考えているのか」と問われて、ペトロさんは一言「あなたはメシアです」と答えました。「メシア」とは「救い主」のことですが、この回答は、既存の聖書理解に基づくものでは無く、ペトロさんがイエス様と行動を共にする中で学び取った新しい知識です。イエス様は、ペトロさんのこの答えに、一応の満足というか、納得をして、この問い掛けを閉じられました。これと同じ出来事を報告している、マタイによる福音書では、このペトロさんの回答を聞いたイエス様が「あなたは幸いだ」と仰ったと言います。そして、特別な天国への鍵をペトロさんに授ける約束までしたとのこと。このマタイによる福音書からの報告も合わせてみると、やっぱり、イエス様は、このペトロさんの回答に嫌な気はなしなかった、というくらいは言えるかと思います。

で、ここまでのお話なら、良い話なんです。「いやぁ、一番弟子のペトロさんは他とは違うなぁ、すごいなぁ」というペトロさんの武勇伝的逸話であり、また、既存の枠組みを超えて新しい知識を学び取ったペトロさんに我々も学ぼうじゃないかという、そんな教育的なお話でもあります。しかし、続くイエス様がご自身の「死と復活を予告する」というお話を読むことで、この素晴らしい回答をしたペトロさんでさえ飛び越えることのできなかった、大きな信仰の壁があった事実を痛感させられます。

私たちは、イエス様のことをよく知っています。神様のこともよく知っています。もちろん、イエス様が十字架で死なれたことも知っています。私たちは、スーパーマンのような、英雄のようなイエス様のお姿を思い描くことはありません。また、神様についても、いつも良いことばかりを叶えて、試練を常に遠ざけてくださる方であるとは思っていません。しかし、それでも尚、私たちは、自らの願いや想いに、イエス様や神様を合わせてしまう。つまり、私たちの側から、イエス様とはこういう方でなければならないとか、神様たる者このような振る舞いをすべきであるとか、不遜にも決めつけてしまうことが時々あるんじゃないかと思います。そして、自分の思い通りに、願った通りにしてくれない、イエス様や神様に対して、勝手に失望し、勝手に見切りをつけ、そして、心を遠ざけていってしまう。そんな躓きの経験は、そう珍しいものではないでし

ょう。

「あなたはメシアです」「あなたは世界の救い主です」と答えたペトロさんも、「イエス様は十字架で死んで葬られ、陰府に下り、3日目に死人の内から蘇り、天に昇り、神様の右に座られた」というところまでは思いを及ばすことはできなかったんですね。それは、ペトロさんが持っていた「メシア理解」「救い主理解」から大きく外れたものだったからです。だから、ペトロさんは、そんな理解不能な教えを「はっきりとお話になった」イエス様に対して、「それ言わない方がいいですよ」と、「いさめ始めた」と言います。日頃、なかなか「諫める」なんて難しい日本語を聞くことはありませんが、これは、原文のギリシャ語を日本語に変換する際に、翻訳者の方々が非常に悩んだことの痕跡だと言えます。「諫める」と翻訳された言葉は、もともとのギリシャ語で「エピティマオー」と言い、その意味するところは「強い非難や叱責」「厳しい警告や命令」です。なので、ギリシャ語のもともとの意味に忠実になって、この箇所を読むと、ペトロさんは、イエス様に対して、非常に強く非難しつつ、厳しく警告を発して、「そんなこと言っちゃダメでしょ」と命令したということです。ちなみに、今日の聖書箇所の33節にある、イエス様がペトロさんを責め立てる場面に書かれている「叱って」という言葉。これも、「諫める」と翻訳された同じ「エピティマオー」の語が当てられています。イエス様は「サタン、引き下がれ」という猛烈な勢いでペトロさんを叱りましたが、それと同じくらいの勢いでペトロさんはイエス様を諫めたのだ、と理解しても良いでしょう。ところで、ちょっと話はズレますが、「諫める」という翻訳をした人たちも、「聖書とは、こうあらねばならない」という自らの枠組みによって、ペトロさんのイエス様に対するキツい発言を、あえて聞き慣れない難しい言葉に言い換えて場を凌いだ、とも言えるかも知れませんね。それだけ、自分の常識や理解を抑えながら、目の前の出来事と真正面から向き合うというのは難しいということです。どうしても、色々な出来事を自分にとって都合良く解釈してしまうのが、私たちの性分なのかも知れません。

生きていれば、嫌なことも、辛いことも起こります。理解に苦しむことや、想定の範囲を超えたことも起こります。あり得ない言動の人に出会ったり、非常識極まりない無礼に遭遇することもあります。ただ、それらの出来事一つ一つに、自分の常識や理解を持ち出して、いちいち否定し

たり、言い争ったりしても、多分徒労に終わることでしょう。世の中には、色々な人がいて、色々なことが起こります。

私たちは、自ら十字架上で死んで世界を救われたイエス様を信じています。最初で最後の完璧な犠牲として、この世の罪を全て担われたキリストを信じています。その信仰的な立場から、この世界を見回した時、そこに見える不条理や理不尽に対して、私たちは希望を持って向き合っていきたいと思います。「どうせ」とか「仕方ない」とか思わずに。「こうじゃないといけない」とか「他にはあり得ない」とか限定せずに。主の十字架によって救いと幸いを示し、主の復活によって未来と希望を繋いでくれた方を思い起こしながら、ですね。

「そんな非常識なことを言わない方がいいですよ」という、私たちの信仰に対する世間様の冷静なお叱りやお諌めの言葉があるかも知れませんが、それでも尚、今ある常識や枠組みでは乗り越えられない世界の困難を前に、私たちは祈りと賛美によって向き合って参りたいと思います。

主の十字架を信じるということ。主の復活を信じるということ。これら、あらゆる絶望によっても汚されることのない力強い希望へと至る確信を持って。今日から始まる１週間も、主に委ねる心の余裕を忘れずに歩いて参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたと、そしてイエス様は、いつも私たちの常識を揺さぶり、枠組みを押し広げて、新しい希望の光が、私たちの心に届くようにと御手の業を振るわれます。時に、その御業が眩し過ぎて、私たちの理解が追い付かないこともありますが、しかし、常にあなたは私たちを愛し、導いてくださる方だと信じて、どんな困難を前にしても、あなたに委ねる信仰を忘れないでいたいと願います。どうか、あなたへの信仰をもって、この受難節を歩む私たち一人一人のことを豊かに顧みて、日々の幸いと安らぎをお与えください。容易く世情に流されることなく、主の御心を尋ね求めながら、キリストの肢として、平和の使者として日々歩み、仕えることができますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。